

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	だんらんの家光明台			
○保護者評価実施期間	2024年 9月 1日 ～ 2025年 3月 31日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	2	(回答者数)	2
○従業者評価実施期間	2024年 9月 1日 ～ 2025年 3月 31日			
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数)	4
○事業者向け自己評価表作成日	2025年 5月 1日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	安全管理と緊急時対応の体制が非常に整っている。 （事故防止マニュアル、BCP、服薬管理、アレルギー対応、虐待防止など）	事故・災害時対応のマニュアル整備と訓練実施 → 事故防止マニュアル、感染症対応マニュアル、防犯マニュアルなどを職員・保護者に周知し、発生を想定した訓練を定期的に行っている	家族参加型の避難訓練や防災研修の実施 → 家族にも訓練に参加してもらい、家庭との連携強化と実効性のある訓練へと進化させる。
2	保護者との信頼関係・情報共有が非常に良好。 （保護者との連携、説明、計画同意、悩み相談対応など）	支援計画の説明と同意取得の丁寧さ → 「放課後等デイサービス計画」を示しながら支援内容を丁寧に説明し、保護者から同意を得ている。 子育ての悩み相談への柔軟な対応 → 面談や助言を通じて保護者の不安や困りごとに寄り添い、安心して預けられる環境づくりを意識している。 通信・SNS等を活用した情報発信 → 行事予定や活動内容を定期的に発信し、保護者が事業所の様子を把握しやすいよう工夫している。	保護者交流会・きょうだい交流会の定期開催 → 保護者間やきょうだい同士のつながりづくりの場を提供し、孤立感の解消と支援ネットワークの形成を図る。ペアレント・トレーニングの導入。子育て支援の一環として、専門家によるペアレント・トレーニングや発達理解講座を提供する。オンラインでの定期個別面談やフィードバック導入 → 保護者の都合に合わせた柔軟な面談形式を用意し、より深い理解と信頼関係の構築を目指す。
3	支援計画と実施体制が丁寧で一貫性がある。（計画作成、職員間共有、モニタリング、基本活動の組み合わせ等）	職員間での情報共有と役割分担の徹底 → 支援開始前後に職員同士で打合せを行い、その日の支援内容や気づきを共有する体制を確保している。 モニタリングと計画の見直しを定期的を実施 → 子どもの状況に応じた支援ができるよう、定期的なモニタリングと支援計画の見直しを行っている。 放課後等デイサービスガイドラインに基づき、複数の活動を組み合わせた支援を工夫して行っている。	支援記録のデジタル化と職員間共有の強化 → クラウドツール等を用いて支援記録をリアルタイムで共有・更新できる仕組みを構築する。 職員間のケースカンファレンスを定例化 → 月1回以上のケースカンファレンスで各児童の支援方針や課題を全体で共有し、支援の一貫性を高める。 活動プログラムの多様化と外部講師の活用 → 芸術、音楽、運動などの専門家を招いた活動や外出活動を取り入れ、こどもの興味関心を広げる支援を行う

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	地域の医療・保健・教育機関や放課後児童クラブなどとの連携・交流が十分に確保されていない。外部とのつながりが限定的で、支援の幅が狭くなっている可能性がある。	地域の保健・医療・教育・福祉機関との情報共有・連携体制が弱く、必要な外部支援や助言を十分に得られていない。放課後児童クラブや児童館、地域の子どもたちとの交流の機会が少なく、こどもの社会性や地域性を育む環境が乏しい。自立支援協議会などの地域連携の場への参加率が低く、事業所としての地域ネットワーク形成に遅れがある。	「連携担当者」の明確化と役割の固定化 → 関係機関や地域団体との窓口役を明確にし、連絡・情報共有・会議出席などを計画的に行う。 月1回の「地域連携ミーティング」の実施 医療機関、学校、福祉関係者などとの情報交換会を実施し、支援情報や困りごとを共有。 地域イベント・施設との共同行事の開催 → 放課後児童クラブや児童館などと合同で季節行事や交流活動を開催し、こどもの社会的経験を広げる。
2	活動プログラムの企画が固定化しており、職員全体でのアイデア共有や創意工夫が十分ではない。こども一人ひとりの関心や変化に応じた柔軟なプログラムづくりが課題となっている。	プログラムの立案が特定の職員に偏っており、チーム全体での意見交換や創意工夫が活発ではない。活動内容がルーティン化・固定化しやすく、こどもにとって新鮮味や挑戦のある支援が減少する傾向。変化するこどものニーズに対して柔軟な対応が難しくなっている。	月ごとの「活動計画検討会」を職員全員で実施 → 週単位・月単位の活動内容をチームで検討し、こどものニーズに合わせた多様なプログラムを考案。外部講師やボランティアの積極受け入れ → 音楽療法士、体操インストラクター、工作ボランティアなどの協力を得て新しい活動を導入。こども自身による「やってみたいことアンケート」の導入 → 自己選択・自己決定を促しつつ、活動内容をこどもの意欲に基づいて組み立てる。
3	その日の支援を振り返るミーティングや、こどもの気づきを次の支援に活かす仕組みが十分に機能していない。こどもが「自分で選ぶ」「自己決定する力」を育む支援も課題として挙げられる。	支援が終わった後の「振り返りミーティング」や「記録の即時共有」が形骸化し、日々の支援に活かされにくくなっている。こどもの「自己決定を育てる支援」が意識的に行われていないため、主体的に選んだり、自分の意思を伝えたりする経験が不足している。	充実を図るための取り組み案： 「支援後5分間ミーティング」の定例化 → その日の気づき・課題・よかった点を簡潔に共有し、職員間での情報伝達の質を高める。 支援記録の「次回への視点」欄を追加 → 日々の記録に「次回こうしてみよう」などの一言を残すことで、支援の連続性と改善意識を育てる。「自己決定支援」のチェックリスト導入 → こどもが自分で選べる場面が日々の支援にあるかを可視化し、スタッフ全員が意識を持って取り組めるようにする。